



天井画が奉納される寛永寺の根本中堂



手塚さんと助手を務める（左から）加来万周、永井健志、松下雅寿の3氏

寛永寺天井画奉納記念 手塚雄二展(仮称)

2024年2月～12月 日本橋三越、福井県立美術館、
そごう美術館、松坂屋美術館を巡回予定
2025年10月 寛永寺奉納

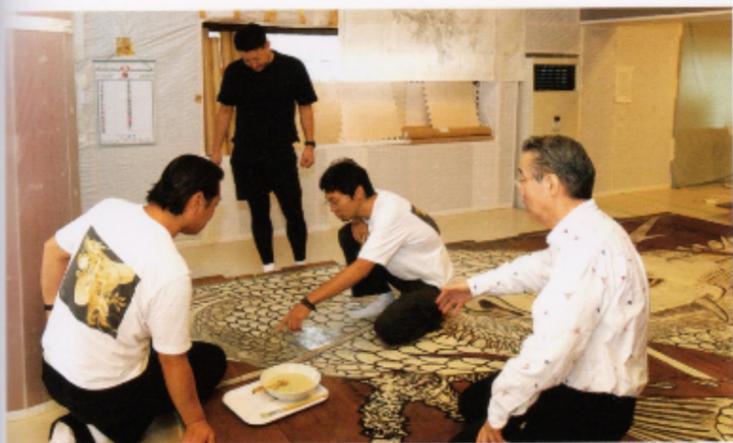
宮の仕事では過去百年にわたって鎮座していた下村観山に代わる屏風絵を描きました。しかも観山は院展の作家です。また、徳川家御用の狩野派の末裔には芳崖、大観がいます。そんな系譜を考えると何か数奇な運命を感じずにはいられません」

残念ながら本欄では、原型となる小下図をお見せすることは叶わなかった。が、双龍図の凄味の一端がビジュアルから伝われば幸いだ。同じく琳派を彷彿させる手塚さんの代表作の一つに『風雲風雷』がある。

その裝飾性、スケールをはるかにしのぐ寛永寺根本中堂天井画は、現代日本画家・手塚雄二の新たな魅力と計り知れない画才を感じさせる令和の一大エポックともなる。2023年の完成、翌24年の一般公開が待ち遠しいのは筆者だけではないはずだ。

(編集部F)

てづか・ゆうじ
1953年神奈川県生まれ。79年春の院展、再興院展初入選（以後毎年出品）。82年東京藝術大学大学院美術研究科修士課程修了。89年第74回再興院展で日本美術院賞・大観賞受賞（同90、91年）。92年日本美術院同人推挙。2000年第85回再興院展内閣総理大臣賞受賞。また、三越、高島屋、松坂屋ほか全国主要百貨店で個展多数。そごう美術館、松坂屋美術館、福井県立美術館などで回顧展。08年米国ニューヨーク市でアジア・コンテンポラリー・アート・フェア2008に出品。16年日本美術院業務執行理事に就任。17年グリーティング助手「日本の絵画」に《月明那智》《美空》が採用。横山大観記念館の理事に就任。19年東京藝術大学大学院美術院にて退任展を開催。「明治神宮内陣御屏風（日月四季花鳥）」を制作。現在、日本美術院同人・業務執行理事、東京藝術大学名誉教授、福井県立美術館特別館長



助手たちに墨の線描の上から白土を塗り重ねるよう指示する画家

「これだけの大きな仕事となると一人では出来ません。そこで、技術的にも人間的にも信頼のおける院展の3人に声をかけました。私も藝大助手時代、平山郁夫先生から同様の依頼を受け大変でしたが、良い思い出になっています。制作は去年の5月の連休明けにスタートしたんですが、今の進行状況は4割程度。年内には墨が入って箔が入ってと、何とか完成の目鼻を立てたい。そして来年は細部の微調整にあてるつもりです。彼らがいなかったらとてもここまで出来ませんでした」

そんな手塚さんの言葉を受け、アシスタントのリーダー格、加来万周さんは言う。「このお話を最初に頂いた時、本当に光栄に思いました。3人ともこれまでにない経験させていただき、手塚先生が実際に手を動かして描いている姿を見られることに

も感激しました。藝大の学生時代もスケッチは見ていましたが、色を塗っている姿はじめてで……。小下図を見た時は、何て品のいい『龍』なんだらう、まさしく東京の龍という印象でした」。さらに「凄いのリジナリティがあって天井画でも本画と変わらない仕事ぶりに驚かされています。本当に濃密な時間を過ごさせてもらっています」と松下、永井の2氏からも異口同音の言葉が返ってきた。

先の明治神宮奉納屏風は内陣の御神座に設置され門外不出、人目に触れることもままならないという作品だった。一転、今回の寛永寺天井画は訪れる信者が祈りを捧げる場のアイコンでもある。その心構えに違いはあったのだろうか。

「明治神宮の時と同様に敬虔な気持ちです。ただ異なるのは、今回は天井画として皆がその下で手を合わせるわけです。それを制作するということは絵描きとして嬉しいとか、嬉しくないとか、そういうものでなく祈りの対象となるようなものを描かなくてはならない。それは大変光栄なことであるとともに、重いプレッシャーでした」

同時に画家は、明治神宮と寛永寺という官軍と徳川幕府を象徴する存在でもあった両寺社の奉納画を手がけることに因縁を感じているようだ。

「私自身は東京藝大名譽教授であり院展の作家です。上野の山に住んでいて、明治神

「普通は線描だけでやるんですけど、墨の調子もすべて入れて写すことにしたからです。天井画は試作した例が残っていませんから自分なりにやり方を考えなくてはなりません。もちろんすべてを自分ひとりで行ったわけではなく、大下図に起こす作業は結局半年がかりでした。皆で、上から俯瞰してかたちが綺麗じゃないとか、爪の角度

家の真骨頂でもあるシャープな筆致のもとに煌びやかに表現されている。とはいえ原画である小下図から大下図を起こすという作業に、実は大変な苦勞が伴ったと画家は言う。

が何かしいとか、部分的にその都度修正を加えていったんです。そうして実際に大下図を根本中堂の天井に貼って確認しました」

手塚雄二の新たな魅力を伝える 令和の一大エポック

前述のとおり今回の天井画は画家とアシスタント3人からなるチームでの制作。メンバーの顔ぶれは、加来万周、永井健志、松下雅寿というそれぞれ院展で活躍する3氏。